



イフパット だより

～農民参加なくして農業なし～

第29号

イフパットがインターン生を受入

はじめまして
hajimemashite
(Mucho gusto.)

わたしの なまえは もえ です
watashino namaewa moe des
(Me llamo Moe.)

わたしは にほん じん です
watashiwa nihon jin des
(Soy Japonesa.)



「私の考える国際協력이フパットでのインターンを終えてー」から
筑波大学2年 数馬田 萌

目次

- P 2 私の考える国際協력이フパットのインターンを終えてー 筑波大学2年 数馬田 萌
- P 3 同上 筑波大学2年 小島 駿亮
- P 4 同上 筑波大学1年 小川 萌望
- P 5 インターン生を迎えての生活改善JICA遠隔研修 イフパット研究員 錦織 紀子
- P 7 イフパットとしてのインターン生受け入れの意義と効果 イフパット理事・主任研究員 和田 彩矢子

NPO法人 国際農民参加型技術ネットワーク

NPO-IFPaT International Farmers Participation Technical Net-work

私の考える国際協力 ーイフパットでのインターンを終えてー 3名の方からの報告

筑波大学2年 数馬田 萌

はじめまして。2021年の夏に約3か月間、IFPaTさんでインターンシップをさせて頂いた、筑波大学 人文・文化学群 日本語・日本文化類2年の数馬田萌(かずまたもえ)です。今回寄稿の機会を頂いたこと、また、本稿に目をとめて頂いたことに感謝致します。さて、本稿では、このインターンを通して私がいかに多くを学ばせて頂いたかを、感謝と共にお伝えできればと思います。

最初に、長くなりますが、インターン参加動機について少し深くお話しさせて下さい。私は、高校に入学した頃からの「海外でも活躍する日本語教師になりたい!」という夢に近づくため、筑波大学に入学しました。1度大学受験に失敗し、両親がくれた二度目のチャンスでやっとつかみ取った、筑波大学の学生生活でした。しかし入学した途端に新型コロナウイルスの影響で全ての講義がオンライン化、海外留学どころか国内旅行さえ出来なくなりました。1年次が終わる頃、私はせっかく入った大学で何をしているのか、分からなくなりました。海外への興味から発展途上国の地域開発に関する講義も履修し、日本語教育だけではなく国際協力への興味が深まっていく中、具体的な行動に移せたものは1つもありませんでした。そんな中で出会ったのが、IFPaTさんでのインターンシップです。海外のこと、国際協力のことをもっと知りたいという思いと共に、なんとしてもこの大学生活を意味のあるものにしたい、行動力のない自分を変えたい、という思いから、参加を決意し応募しました。これは私にとって非常に重要な思いで、インターン活動の最後まで私の大きな原動力であり続けました。

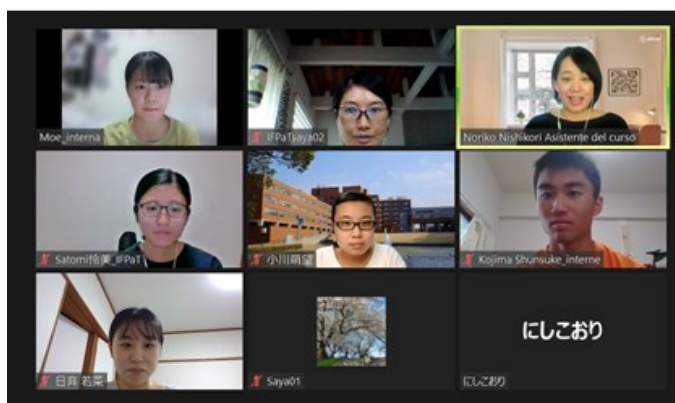
インターンの期間中、スペイン語で行われる生活改善研修への参加・質疑応答の議事録作成を中心に、チームビルディング活動、Facebookでの研修内容の発信など、様々なお仕事を任せて頂きました。最初に頂いたお仕事がチームビルディングの活動で、研修員の方々への日本文化紹介、日本語の挨拶・自己紹介レクチャー、名前カタカナ表記のレクチャーを行いました。インターン生全員で役割を分担したのですが、私は挨拶・自己紹介の枠を担当し、日本語非母語話者の方に日本語をレクチャーする初めての経験となりました。その際のPPT資料について、「ます/です」を「masu/desu」ではなく「mas/des」と表記した方がスペイン語話者にとって正しい発音で練習しやすい、と和田さんにアドバイスを頂きました。生活改善研修に関わる者としても、日本語教師を目指す者としても、「相手の立場になって考えること」の難しさを実感し、その大切さを学んだ瞬間でした。(表紙の写真参照)

また、研修における質疑応答の議事録作成からも、毎回多くのことを学びました。講師の方のお話からはもちろん、研修員の方々がどのような質問をするかということところからも、大学の講義では学びきれない、このインターンに参加したからこそこの「リアル」を感じました。数回にわたる議事録作成を通して、生活改善における物資・金銭的な支援の加減と、そこに依存させず自立に導くことが、いかに複雑で難しいかを学び、「支援」のあり方について考えさせられました。その一方で、ひとつひとつの質問についてじっくり考えて丁寧に回答されている講師の方々の様子や、仕事と研修との両立で多忙なはずの研修員の方々の、研修中の生き生きとした様子から、国際協力の根本に人と人との繋がりとその温かさ、楽しさがあることに気が付き、難しいだけではない、国際協力の素晴らしさを感じました。

また、研修における質疑応答の議事録作成からも、毎回多くのことを学びました。講師の方のお話からはもちろん、研修員の方々がどのような質問をするかということところからも、大学の講義では学びきれない、このインターンに参加したからこそこの「リアル」を感じました。数回にわたる議事録作成を通して、生活改善における物資・金銭的な支援の加減と、そこに依存させず自立に導くことが、いかに複雑で難しいかを学び、「支援」のあり方について考えさせられました。その一方で、ひとつひとつの質問についてじっくり考えて丁寧に回答されている講師の方々の様子や、仕事と研修との両立で多忙なはずの研修員の方々の、研修中の生き生きとした様子から、国際協力の根本に人と人との繋がりとその温かさ、楽しさがあることに気が付き、難しいだけではない、国際協力の素晴らしさを感じました。

インターン中、生活改善研修に関わるお仕事以外にも、とても貴重な機会を頂いていました。それが、毎週金曜日のキャリアアップセミナーです。大使館に勤務される方、JICA職員の方、そしてIFPaTの方々と、3ヶ月の間に10名もの方からとても貴重で勉強になるお話を頂きました。私に足りない行動力・勇気はもちろん、魅力的な考え方と強い軸を持った方ばかりで、毎回のお話が私にとって大きな刺激でした。インターンを終えて私が自分で実感できる

ほど成長できたのは、このキャリアアップセミナーがあったからこそでした。国際協力における心構えや就職に関することなど、ここでは書ききれない多くの学びがあった中で、最も強く心に残ったのは、広い視野を持ってあらゆる挑戦をすることの価値と、そこに必要な努力の大きさでした。それは私が今までしていた「努力」とはかけ離れており、自分の考えの甘さを思い知らされました。そして、とにかく何事にも挑戦して学びと経験を積み、そのための努力をし続ける決意をしました。この決意が、私に行動力を与えてくれました。



私たちにたくさんの挑戦をさせて下さり、評価とアドバイスで自信を持たせて下さったIFPaTの和田さんと錦織さんをはじめ、貴重な経験をさせて下さった中南米の研修員の方々、講師の方々、キャリアアップセミナーでお話し下さった方々に、心から感謝を申し上げます。インターン終了後の現在、私はさっそく日本語教師へ近づくための新たな挑戦をはじめました。今後は語学など基盤となることをしっかり勉強しつつ、「何事も無駄にはならない」という意識を持ち、さらに夢を追っていきたいと思います。このIFPaTさんでのインターンシップで得たものを、ずっと大切にしていきます。本当にありがとうございました。

インターンの皆さんが運営に協力したJICA研修

コース名:2021年度課題別研修「中南米地域 生活改善アプローチ 持続的農村開発のための普及手法の適用と普及員育成」

研修期間:2021年8月31日～2021年10月15日(遠隔)

上位目標:政府や関連機関の農村開発政策に、生活改善のコンセプトが取り入れられ継続実施される。

研修目標:農村開発計画等において、普及員育成を含む生活改善活用案が実施される。

筑波大学2年 小島 駿亮

はじめまして、今年の夏、IFPaTでインターンをさせていただきました筑波大学2年の小島駿亮と申します。よろしくお願いします。今回のIFPaTでのインターンではオンラインという形でしたが、様々な業務に参加させていただき、沢山のことを学ぶことができました。

具体的な学びとして

- ・キャリアアップセミナーや日々のインターン業務などを通じ国際開発に携わる仕事内容の理解。
- ・インターンでお会いする機会があった中南米の研修員が問題と思っている開発問題。
- ・IFPaTの方々や研修員の方々をはじめとする国際開発に携わる人たちの行動力。

上の3点以外にも役に立つ質問の仕方など多くのことを学び、非常に実りのあるインターンとなりました。これらの学びを通じ、今後の進路や考え方を再検討し変えていくことができました。学んだことと同じように具体的にあげたいと思います。

(インターン前)

- ・国際開発に携わる仕事の内容が分からず、単純に国際開発に携わりたいと考えていました。
- ・学士を取得後に青年海外協力隊に行きたいという漠然とした強い思いがありました。

(インターン後)

- ・キャリアアップセミナーやIFPaTにおける業務や海外、国内での実地業務などを通じて国際開発に携わる仕事の詳細がわかりました。
- ・学士卒業後にすぐ青年海外協力隊に参加することのメリット、デメリットを知ることができました。その結果、漠然と青年海外協力隊を目指すのではなく、留学等の他手段を利用することも検討したいと考えました。

このように、インターンを通じて沢山の学びを得ることができ、考え方の変化を体験することができました。

最後にこれらを踏まえた、私が考える今後に関して簡潔に述べたいと思います。私は観光開発に関心があり、大学でもその分野に関連する内容を学んでいます。大学在学中にエコツーリズムの研究が盛んな海外の大学に留学し、知見を広げたいと思っています。そして、卒業研究では観光を通じた地域振興を研究して、成果を発展途上国をはじめとした様々な国に応用していきたいと考えています。最終的には、日本と発展途上国を観光で結ぶ仕事で双方に喜んでもらいたいと考えています。

進路の実現に向けてインターンで培い、そしてより磨いていこうと考えた行動力を存分に活かして少しずつ、ただ大胆に行動していきたいと思っています。最後に不甲斐ない自分のサポートをしていただいた和田さん、錦織さんをはじめとするIFPaTの方々、同じインターン生の方々、ひびさんをはじめとするドットジェイピーの方々に感謝を申し上げ、終わりとします。

長文となりましたがありがとうございました。

筑波大学 1年 小川 萌望

国際協力に対する考えの変化

将来、貧困問題を解決するという観点から途上国支援に携わりたいと志す自身にとって、今回のインターンシップでは、途上国支援に携わる上での大切な姿勢を学ぶことができた。研修のセミナーでは、生活改善に実際に携わった方や、日本の大学教授の方々から多数ご講義を頂いた。私自身、研修員や講師の方の発言、質疑応答からいかに援助に頼らない国民を育成することが大切で、大変かを知った。

入学当初は、更に援助額を増やしても良いという国民の世論を盾に、日本のODA額を増額し必要なインフラを整えるなど、最低限の生活基盤を整えるべきだ、という考えを抱いていた。しかし、それは先行き不透明で、そのような安易な考えはしてはならない、と自分を戒める根拠を実状から得ることができた。

研修員は援助に依存しすぎる農民に頭を悩ませ、同じような内容のことを何度も質問していた。安易な考えが、取り返しのつかない事態を招く前に、プロ

ジェクト計画を見据えながら対応していく必要があると強く思った。そこで、対話が双方にとって重要なカギとなり得ると考えた。日本の生活改善普及員の歴史を辿ると、常に生活改善普及員が農民に寄り添い、ダメなところを指摘するのではなく、できることを探すと共に問題点をほのめかしていた。そのような前に立つのではなく横に立つ、農民と同じ立場から物事を考え、説得しつづける姿勢が肝心で、その対話を通して徐々ににおんぶされていた農民が巣立っていくのではないかと考えるに至った。

IFPaTの「考える農民の育成」という理念が意味することが、このインターンを通してはっきりとし、今後の研究の礎としたいと強く思った。そして、今後現地の方々との対話を大切に、生活改善に携わりたい、と強く思うようになった。また、実際の研修では、事務的な作業が多かったが、そこから今後社会に出て仕事をしていく上で欠かせないことを数多く学ぶことができた。当日のインターン業務内容の確認から事後の振り返り、更には現代のSNSツールを用いた情報発信を経験させていただいた。実際に働かれている方々と密に、そしてある程度の期間を通して活動させて頂くのは今回のインターンが初めてで、大人の立ち振る舞いを学ばせて頂く非常に良い時間であった。

最後に、週に一度開催して頂いたキャリアアップセミナーを通して、JICAご勤務の方々からキャリアのお話を多数伺うことができた。その中で、偶然が必然を呼ぶことや、がむしゃらに自身の興味に取り組んでいたら自ずと今の職を手にしていて、など人生必ずしも思い描いた通りにはならない困難さと、奇跡の連続を思い知った。そして、沢山の情報をご提示頂いたことで、いかに自分がきちんと将来にむけて準備していないかを知ることができた。焦らず、情報収集を怠らずに、何年か後に再度同じよ



写真:リモートで参加した生活改善研修コースの研修員とイフパット関係者の皆さん

うな反省をして後悔しないように前に進み続けよう、と勇気を頂いた。このインターンシップは、自身の将来携わりたい方面の理解を促進することができたと共に、将来社会に出て必要な立ち振る舞いを身につけることができた。非常に有意義な2か月間であり、インターンシップに参加して良かった、と強く実感している。

自身の進路においての意義

先述した通り、自身が将来貧困問題解決に携わっていく上での重要な指針を得ることができた。必要最低限の物資を届けることは大事だが、なぜ援助を受けても生活が改善しないのか。そのように自ら考える農民、あるいは、住民としての主体性を、対話を通して培わせていくことが大事であると学んだ。その点、中南米の農民の現状を知ること、理解が深くなった。途上国支援、開発にあたっては様々なセクターがあるが、その1つとして捉えることができるようになったと考える。また、今回参加した生活改善プロジェクトのようなコミュニティ開発に自身も将来従事したいと考えるようになった。

一緒に活動させて頂いたIFPaTの方々やその他JICAでお勤めされている方々の姿や取り組みを間近で拝見し、枠にとらわれない仕事の内容に関心を抱いた。それ故、自身の長所である柔軟性をこの業界で発揮できるのではないかと考えた。その点、自身の将来の方向性を少なからずクリアにすることができたといった点では、意義があるインターンシップであった。

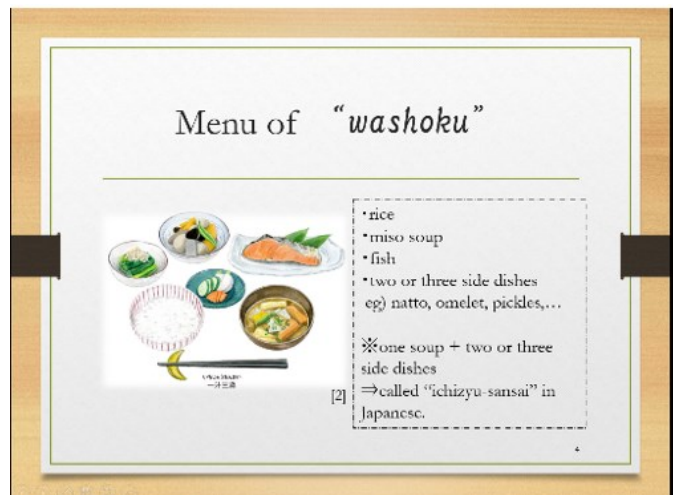


写真:日本文化紹介の発表

最後に、今回活動した中での研修内容は、日本の事例から研修員が学ぶものだった。自身は日本文化紹介の際の質疑応答で、戦後の日本の開発力に言及されたが、回答することはできなかった。しかし、今後世界をフィールドに活躍したいと考えている次第、しっかりと日本の歴史や経済成長について今後より主体的に学んでいきたい、と今後履修する授業の展望へと繋げることができた。

インターン生を迎えての 生活改善JICA遠隔研修

IFPaT研究員 錦織 紀子

2020年度に引き続き、2021年度のJICA課題別研修「中南米地域 生活改善アプローチ持続的農村開発のための普及手法の適用と普及員育成」コースでも、NPO法人ドットジェイピーの主催するNPOインターンシッププログラムに参加するかたちでインターン生を迎え、業務参加を通じて私たちNPOが行っている活動についての理解と、コロナ禍で今年も遠隔となりましたが、より充実した研修となるようインターンの皆さんに協力いただきました。

今回のインターン生は、筑波大学から1年生小川萌望さん、2年生小島駿亮さん、2年生数馬田萌さんの3名に加え、前年度からインターン生として本研修業務に参加の日本大学4年生笠掛怜美さんも引き続き協力してくれました。

遠隔研修も2年目となり手探りで進めた昨年の研修とは違い、少しは慣れて余裕も生まれてきました。とはいえ4名の学生を迎えるにあたって不安がなかったわけではありません。遠隔での参加で何をどこまで任せてよいのか、夏休みを利用して参加してくれる学生たちが満足できるインターンプログラムを提供できるのか、4名全員に適切なサポートができるのかなど、私の頭の中は不安で仕方ありませんでした。しかし、和田業務総括が生活改善の理念である“今できること”にフォーカスして、担当業務をピックアップしてもらったことで、たとえスペイン語を履修していない学生にも、この研修業務を通して活躍の場が多々あると気付くことができました。

特に研修開始前、来日できない研修員に対し日本について理解を深めてもらうことを目的に開催した「日本文化紹介」では、インターン生4名それぞれの個性が発揮され、我々スタッフでは到底用意出来ないバラエティに富んだ題材をテーマに発表を行い、研修員から好評を得ました。

【インターン生に従事していただいた
主な活動内容】

●オンライン研修での作業

- ・研修員発表時のタイムキーパー担当
- ・日本語講師の講義中の質疑応答を記録
- ・インターンの講義「日本文化紹介」での発表（日本文化の紹介 ①月見・お花見について ②旬の食べ物・イベント・四季について ③和食について・箸の使い方）／日本語でのあいさつと自己紹介／名前をカタカナで書く練習／質疑応答）
- ・研修員からの質問に対する講師の助言事項の抽出と議事録作成
- ・オンライン研修終了後、研修員とのフリートーク

●その他の作業

- ・定期的な研修振り返りの実施
- ・キャリアアップセミナーへの参加
- ・新設したイフパット生活改善広報用Facebookへの定期的な投稿（オンライン研修参加で感じたことや学びに加え、研修員の様子や考え、発言について投稿）
Facebook : <https://www.facebook.com/EMVIFPaT>
- ・研修で使用するPPT、Wordデータの編集作業
- ・インターン活動報告会（オンライン）での発表

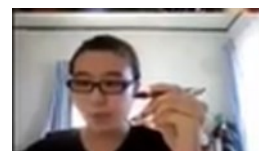
また、日本語による講義中の質疑応答を記録する作業では、複数のインターン生に同じ講義の記録を行ってもらったことで、重要なポイントを押さえた要約であったり、細部まで記載された記録であったり、それぞれ必要場面に応じて資料を利用できたことが大変助かりました。インターン生は学生とはいえ、しっかりと準備を行い、不明な点がある場合は事前に確認し

た上で参加してくれたので、安心して業務を依頼できました。

定期的に行ったキャリアアップセミナーでは、内部のみならず外部講師にもそれぞれのご経験を発表していただき、インターン生から毎回多種多様な質問がなされました。進路について、大学院へ行くタイミング、学生のうちにやっておいたほうが良いこと、JOCVや留学についてなどから人生や生き方全般に及ぶものまで、沢山の質問とその回答を聞くことができ、受け入れ側である当方にとっても深い学びに繋がりました。

講師の方とインターン生双方の国際協力に対する熱い情熱と真摯な姿勢を目の当たりにして、あらためて自分自身がここでどう在りたいのか、どこへ向かっていきたいのかを振り返る良い機会をいただきました。

最後にインターン生の皆様一人一人に宛てたメッセージを載せることで、どれだけ素晴らしく有能なインターン生を迎え入れることができたか、この場を借りてお伝えできればと存じます。



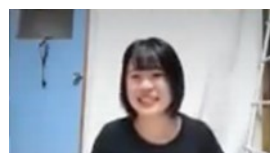
小川萌望さん

いつもポイントをしっかりと押さえた質疑応答記録を作成いただき助かりました。素直でまっすぐな小川さんの姿勢と国際協力に対する情熱から、我々もいろいろなことを学び、とても良い刺激を受けました。今後も同じフィールドで再会できるのを楽しみにしております。



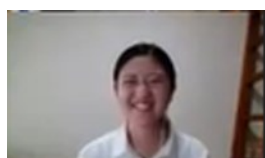
小島駿亮さん

行動力と瞬発力を兼ね備えエネルギーに満ち溢れた小島さん、日本文化紹介の際の臨機応変に対応される姿は誰にでもマネできるものではなく、感動いたしました。今後とも沢山の出会いと経験を積み、常に学び続ける魅力的な人間として世界を舞台にご活躍されることをお祈り申し上げます。



数馬田萌さん

柔らかい雰囲気場で場を明るくし、丁寧で確実に仕事をしてください大変助かりました。その人柄から日本語教師になられても言語だけではなく、文化や精神、そして思いやりを伝えられる素敵な教師になれるのではと感じました。夢が実現するよう陰ながら応援させていただきます。



笠掛怜美さん

進路について迷いながらもしっかりと考え自分の納得できる答えを探す姿勢がとても素敵だと思いました。今後、他業種へ就職後も、その経験を生かして

国際協力に関わっていく強い決意をお持ちで努力を惜しまない笠掛さん、専門もわかるジェネラリストとして活躍されますことをお祈り申し上げます。

インターン生の皆様、イフパットのインターン生として従事頂きありがとうございました。また、インターン受け入れ期間中、丁寧にサポートいただいたNPO法人ドットジェイピーススタッフの日弁若菜様、心より感謝申し上げます。

帰国研修員からの便り



研修参加後3か月が経ち研修員より活動報告が届きました。マヤさん(ボリビア、NGOプロスペランサ)にとって家庭訪問は、信頼の絆を作るために最も重要な活動であった。現実を見ることの重要性を示し、その中で実際の状況を確認し、彼らは自信を持つことができた。



イフパットとしてのインターン生受け入れの意義と効果

理事・主任研究員 和田彩矢子

コロナ禍で本邦研修の場を失い、研修時間外を利用して日本人の人情や礼儀、日常生活の小さな工夫や生活改善の知恵を直接見聞きする機会が得られない中、遠隔研修のみでも懸命に「学び」を吸収する研修員。また長年の目標であったにも関わらず大学生になった途端にコロナ感染症のため海外へ挑戦する機会が制限され外国人と接する場を失った学生。微力ながら私たちNPOイフパットとして少しでも社会貢献し、双方にメリットがあるようにという想いでインターン生受け入れに動きました。

日々我々が研修や草の根事業のモットーとしている「人づくりを通じた国際協力」「主体性醸成による持続的地域開発」の大事な要素を次の世代に引き継ぐ好機会でもあります。コロナ禍でイフパットの自主事業の進展も制限があるなか、インターン受け入れ全日程をオンラインで完了でき、学生が研修員と共に楽しく生活改善アプローチを学んだ様子が確認でき光栄です。

「日本に行けなかったけど、文化紹介やフリートークで学生の思いを聴き色々おしゃべりでき日本を身近に感じられたよ(研修員)」。

インターン生と研修員の交流セッションは、リラックスした環境のもと研修員間の信頼関係構築、緊張緩和に役立ちました。

対面でしか味合うことのできない、人との触れ合いに欠けるといわれがちな遠隔研修ですが、研修前後にチームビルディングを目的に対話や質疑応答を通じ「ふれあい」の面は遠隔でも補完可能とわかりました。

ネット環境の問題で講義では画面表示をオフにしていた研修員も、放課後フリートークでは画面オンで大いに笑いながら自国の食べ物や文化を共有。「ププサって何？」と南米研修員が質問するとエルサルバドル研修員が冷蔵庫に取りに行き「これだよ！」と見せられるのが遠隔研修の良いところ。負けじと日本のビールを皮切りに、各国のビールや地酒が次々に登場し居酒屋気分です。

笑いも沢山起きる中「日本は戦争で焼け野原になったのに、どうして今のように経済発展できたの？」とペルー研修員が質問。インターン生は互いに顔を見合わせますが「今は回答できないので少し調べたい」と回答。その場では答えられなくとも、その後自主的に情報収集し、最終日にきちんと研修員に自身の言葉で考えを述べていた点は大変心強く成長を感じました。

「国際協力を目指す学生が多いなか、インターンを受け入れるNGO/NPO組織が多くない事実があるんです。」と、インターンシップ事業を運営する組織ドットジェイピーの担当学生が、学生のニーズになかなか全て応えられていない状況があります、と話してくれました。学生の夏休みと春休みにインターン派遣がなされるので、本コースだけでなく農業機械化促進、農村開発、アジア圏の青年研修など多方面の案件で、時期を調整し、イフパットとしてインターン生を積極的に受け入れたいところです。国際協力への参加を希望するインターン生へ活かす機会を提供すると共に、イフパットの国際協力の手法を習得してもらう事は非常に意義ある事です。

余談ですが今回我々と共に学んでくれた3人はドットジェイピーさん主催のインターン生による「方策コンテスト」にて「理解し共存しあえる社会」をビジョンに掲げ、インターンでの学びを活かしプランを検討し、見事優勝したそうです。優秀な学生さんに出会えたこと、また彼らの今後の人生に少なからず小さな道しるべを灯せたことは総括冥利に尽きます。

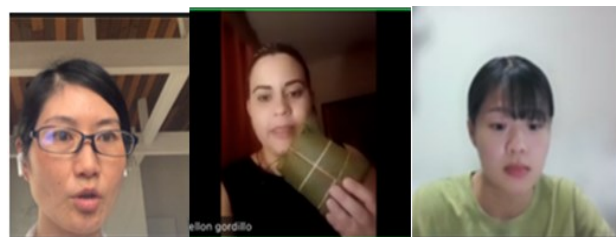
(JICA「中南米地域 生活改善アプローチ」コース研修総括)

エピソードその1



エクアドル研修員とインターン生に自転車競技という共通の本格趣味が！自転車での長距離走や高山突破の写真を見せ合い、翻訳機能を活用し対話し、言語の壁を越えて共通項で話しが盛り上がりました。

エピソードその2



「これTamales(タマレス)は、トウモロコシ粉の生地を丸め、チキンを入れてバナナの皮で包んで蒸した料理よ。美味しいのよ～」：パナマ研修員がインターン生に夕飯を紹介する一幕！

NPO便り第29号に寄せて

編集文責：永井 和夫

NPOイフパットのインターン受入で思う

ウィキペディアによると、インターンシップとは、特定の職の経験を積むために、企業や組織において労働に従事している期間のこと、とあります。また、企業や組織におけるメリットとして、①仕事を体験する機会を提供する社会貢献、②若い大学生受け入れによる社内の活性化、③学生の指導を通して若手社員のマネジメント力やリーダーシップを養う、とあります。

イフパットのような小規模な組織は定期的に職員を採用するわけでも無く、育成すべき若手職員もおらず、あるとすれば「仕事体験の機会を提供する社会貢献」程度と考えていました。

「長年の目標であったにも関わらず大学生になった途端にコロナ感染症のため海外へ挑戦する機会が制限され、外国人と接する場を失くした学生。微力ながら私たちNPOイフパットとして少しでも社会貢献し、双方にメリットがあるようにという想いでインターン生受け入れに動きました。」という、今回のインターン生受入に積極的に動いた和田研修総括に頭の下がる思いです。

「イフパットだより」に関する照会・連絡先

NPO法人国際農民参加型技術ネットワーク（イフパット）
〒300-1241 茨城県つくば市牧園5-13-203
Tel: 029-875-4771 E-mail: info@npoifpat.com
ホームページ: <http://npoifpat.com/>